

木曾馬



木曾馬は、木曾地方の風土、風俗が長い年月を経てはぐくんだ文化的、民族的遺産です。かつて最盛期には数千頭もの木曾馬が飼育され、農家の人々の暮らしを支えてきましたが、時代の変遷とともに経済的、用途的価値はしだいに失われ、今では一部の木曾馬愛好者と木曾町などの公共団体等により、この開田高原地区を中心に木曾郡内で約 60 頭、全国的にみても 160 頭ほどが飼育されるのみとなりました。

この生きた文化財、民族的遺産である木曾馬を後世に残そうと観光面のほか、生涯学習などに利活用して、人と馬のふれあいの場を作りながら保護・育成をしようという計画が現在も進められています。

木曾馬保存会

木曾馬の由来

木曾馬は北海道の北海道和種(道産子)や宮崎県日南海岸の都井岬に野生放牧されている天然記念物の御崎馬と同じように、日本で昔から飼われていた「日本在来馬」とか「日本和種」といわれる馬です。中型馬に属し体高は平均133cmです。明治時代中頃まで、日本在来馬は日本中どこへ行っても飼われていましたが、ほとんどが絶滅してしまい、その中で木曾馬は奇跡的に高い純血度を保ちながら生き残りました。

木曾馬の起源についてははっきりしていませんが、紀元前1世紀頃、漢の時代「天馬」あるいは「汗血馬」といわれた中央アジア タルバン系 高原馬の血液によって改良されたであろうといわれる蒙古草原馬が、2～3世紀頃朝鮮半島を南下して渡来したと考えられています。そして5～6世紀以降になると、渡来する馬の数は次第に増加し全国に分布していったと思われます。

木曾馬についての最古の記録として、安閑天皇の御代(530年代)元木曾の神坂村湯舟沢霧ヶ原に牧場が設けられ、馬の飼育が始まったと考えられています。その東山道木曾路の完成(713年)によって高い文化をもった氏族の移動に伴い、同地に持ち込まれた馬が木曾馬の祖先になったと思われます。開発が進むにつれ馬はしだいに奥地へと移動し、木曾馬の生産地が形成されました。いずれにしても、木曾馬は1300年に及ぶ長い歴史を木曾の人々と共に生きながらえてきた在来種です。

1180年木曾義仲挙兵の頃には、木曾馬は優れた馬として名声が高まり、各地の武将は競って木曾に名馬を求めたといわれています。以降、幾度かの移り変わりはあっても徳川時代を通じて、木曾馬は木曾代官山村家の管理下で武士の象徴であり、交通運輸の担い手として日本文化の発展に貢献してきました。

明治に入ると山間地農耕馬として需要が増大し、価格も高騰して馬は農家にとって貴重な現金収入源となり、飼育頭数も7000頭に達したといわれています。ところがその後、木曾馬は小柄な為軍用馬としては不適合であるとされ、国は外国種の種雄馬を導入し改良を押しすすめ純系種雄馬や木曾系種雄馬を廃止し、とうとう昭和18年を最後に木曾系種雄馬は最後の1頭までも淘汰されてしまい、第二次大戦の終結を迎えました。昭和21年になり木曾馬復元と保護育成事業を開始しましたが、幸いにも戦時中、

改良方針に背いて密かに純系木曾馬を残してきたことによって、戦後すぐに木曾系種雄馬を供用することができ、また、昭和24年には更埴市の武水別神社において純系の雄馬 神明号 を発見することができ、昭和26年には名馬 第三春山号 が誕生し、木曾馬保存事業も機動にのりはじめたのです。ところが、年を追って農業はしだいに機械化され、木曾馬は実用性のない家畜として飼育者が減少するのみで、絶滅の一途を辿りはじめました。ついに、昭和40年代に入ると、かつて数千頭飼育されていた木曾馬も幻の運命



にさらされることになったのです。このような事実を見るに忍び、昭和44年、当時開田村長であった伊藤正起氏らを中心に木曾馬保存会が結成されました。また、平成7年には開田村に保存の中心的施設となる木曾馬の里が設けられました。保存会結成以来40年余年、一時は50頭以下に減少してしまった木曾馬も徐々に頭数を増やし、現在では木曾地域に約60頭、全国では約160頭が保護育成され、乗馬などを中心に利活用されています。



木曽馬の特性と将来について

木曽という山また山の険しい山間高冷地で永年飼育されてきた木曽馬は、厳しい自然環境に適応して極めて強健で粗食(雑草などでも飼育できる)に堪える馬です。

享保大飢饉(1732年)の折には木曽谷でも多くの餓死者を出したと云われますが、木曽馬はススキやカリヤス等の干草で充分栄養を保つことができ、何等人間の食糧と競合しなかったので多くの馬が死を免れたようです。蹄は高く堅牢で農耕馬としての使役では蹄鉄をうつ必要がありません。後肢の飛節がX状で曲飛なので、狭い山路でも踏みはずすことなく、急な坂を駆け上がったり、下りることが上手な馬です。最近では余りみることがなくなりましたが、側対歩という片側の前肢と後肢を同時に運ぶ歩様も上手だったので背中に荷物を載せていても前後のゆれが少なく、荷くずれすることなく、乗馬しても楽だったようです。

木曽馬には鰻線まんせんといって背中中央に黒い筋があります。また、大正の始め頃までは月毛、河原毛、芦毛等の白い馬が20%近く飼われていたようです。佐目月毛といって体は真白で眼の赤い雄馬が御神馬として開田村から伊勢の皇大神宮へ、上松町から大阪の住吉神社へ奉納されたこともあります。

木曽馬は人と同じ屋根の下で、しかも日当たりの良い東南向きの厩うまやで婦女の手によってわが子同様、深い母性愛のもと育まれたので極めて性質温順でかしこい馬で、鞭むちをくれてはいけないといわれています。一度叩打したりして取扱い方法を誤ると暴れてしまい制御困難となってしまうこともあります。また、木曽馬は帰趨性をもっているため長年飼育された家を忘れないで、山を越えて生まれた元の厩へ帰ってくることもあったようです。

木曽馬は、日本本土に最後まで残った貴重な日本在来馬であり、かけがえのない文化遺産です。今日ではさまざまな場所で乗馬や生涯学習などの分野における利活用により、なんとか絶滅の危機を免れつつありますが、戻し交配による近親繁殖障害の除去をはじめ、飼育地山村の過疎化と飼育者の高齢化等によって若い飼育後継者や新たな利活用先の開拓が今後の課題となっています。戦国の武将をその背に、日本の歴史を駆け巡り、人を欺くことも裏切ることもなく人間の意のまま忠実に長い歳月を生きながらえてきた木曽馬をなんとかして次の世代に文化と共に残していきたいと思っています。

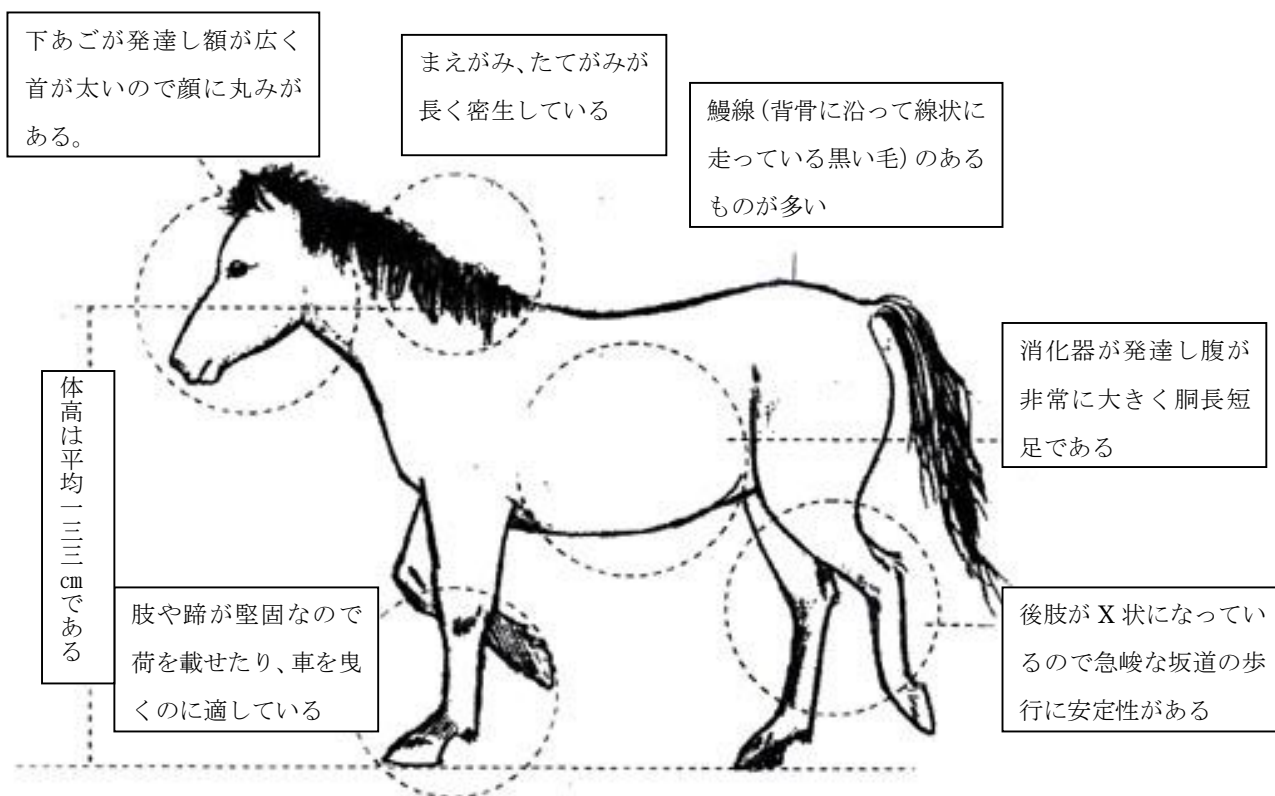
厳しい運命にさらされている木曽馬ですが、滅ぼしてしまうようなことがあれば必ず後世に悔いを残すことになります。幻の家畜とならないよう木曽馬への限りない愛情と熱意を注いでいく必要があります。木曽馬のふるさと開田高原のあちこちに、木曽馬がのどかに草を食み多くの方が木曽馬とふれあい、木曽馬を知っていただき、利活用に保護育成と共に利活用に協力していただける日が来ることを待ち望んでいます。

(木曽馬保存会初代会長 伊藤正起氏の文より一部引用)

木曽馬保存会事務局



木曾馬の特徴（形態上の特徴）



日本在来馬の分布

日本在来馬は日本古来の実改良の小型馬（体高115cm前後、トカラ馬など）、中型馬（体高135cm前後、木曾馬、北海道和種、御崎馬など）で、現在全国に8馬種が保存されています。

- ①北海道和種馬(道産子) 北海道（太平洋側）
- ②木曾馬 長野県及び岐阜県<木曾郡下の一部の馬は長野県天然記念物>
- ③野間馬 愛媛県今治市<今治市の天然記念物>
- ④対州馬 長崎県対馬
- ⑤御崎馬 宮崎県都井岬<国の天然記念物>
- ⑥トカラ馬 鹿児島県（トカラ列島ほか）<鹿児島県天然記念物>
- ⑦宮古馬 沖縄県宮古島<沖縄県天然記念物>
- ⑧与那国馬 沖縄県与那国馬<与那国町天然記念物>

